

川尻筆

1 川尻筆とは

川尻筆は、ひろしまけんくれしかわじりちょう広島県呉市川尻町において、江戸時代末期から農閑期の副業として、うえのやえきち上野八重吉が製造を初め、今では同町の主要産業として、伝統と技術を綿々と受け継がれている。

川尻町の筆づくりにおいては、「練り混ぜ（ねりまぜ）」という毛混ぜの技法が一般的であり、この技法は大量生産には向かないが、反面、高度な技術を必要としていることから、出来上がった製品は高い品質の筆となる。

2 工芸品の特長と手工業性について

川尻筆の製作は、大きく分けて、ほくび穂首製作工程、軸製作工程、完成工程の3つの工程に分けられるが、いずれの工程も古くからの技法によって1本1本手作業で進められ、それぞれ複雑な工夫と気配りを経て丹念に仕上げられる。

原材料は主に、穂首に獣毛、軸には竹や木を使用しているが、獣毛は川尻筆が製造され始めた頃から使用されており、今なお用いられ続けている。

3 沿革・伝統性について

(1) 沿革

川尻町と筆の関わりは、「川尻史」によると天保9年（1838年）に、きくたにさんぞう菊谷三蔵が摂州有馬（現在の兵庫県）から筆を仕入れ、寺子屋などで販売したものが始まりと言われている。筆の商売で成功の後、村人に筆の製造が農閑期の副業に有利なことを説き、安政6年（1859年）、上野八重吉が作ったのが、川尻町における筆製造の始まりとされている。その後何人かの業者がつづき、「川尻筆」としての産地形成をなし、その名を全国に知られるようになった。

明治時代に入ると学制の制定、小学校令の改正によって筆の需要が高まり、川尻筆は大いに発展し、明治34年（1901年）、全国に先駆けて株式組織のかわじりひつぽくかぶしきがいしゃ川尻筆墨株式会社の設立もあり、技術面、経営面でも飛躍的な進歩を遂げた。

しかし、第二次世界大戦中、戦争に多くの職人をとられたことや戦後の学制の変更で学校習字が廃止されたこともあり、一時、衰えた時期もあったが、昭和42年（1967年）にかわじりもうひつじぎょうきょうどうくみあい川尻毛筆事業協同組合が組織され、経営の合理化、近代化が実現したほか、昭和46年（1971年）には学校習字が復活するなどにより、川尻の主要産業として「川尻筆」の技術と伝統は今もなお受け継がれている。

(2) 参考文献・資料

- ① 「賀茂郡志」（1916年3月）広島県賀茂郡私立教育會発行
- ② 「筆毛仕入帳」（1893年）渡邊酒店
- ③ 「毛組帳」（1892年）玉林堂（現（株）やまき筆菊壽堂）
- ④ 「川尻史」（1927年）川崎春吉編

4 伝統的な技術又は技法

- ① 毛もみの作業には、もみがらの灰を用いること。
- ② 寸切りは、寸木及びはさみを用いること。
- ③ 混毛は「練り混ぜ」（ぼんまぜのあと練り混ぜを行うものも含む。）によること。
- ④ 糸締めには、麻糸を使用すること。

5 伝統的に使用されてきた原材料

- ① 穂首は、山羊、馬、イタチ、狸、鹿、若しくはこれらと同等の材質を有する獣毛とすること。
- ② 軸の素材は、竹 又は木を使用すること。